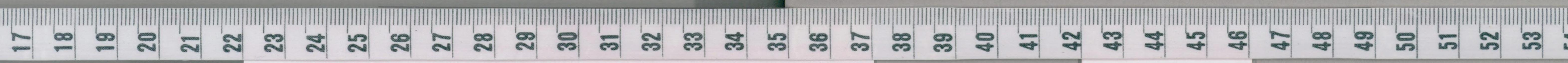


紀州船一葉丸漂流一件覚

862
119
1



国立国会図書館 タイトル『紀州船一葉丸漂流一件覚』 請求記号 862-1

ガラス使用

25 53 I



国立国会図書館 タイトル『紀州船一葉丸漂流一件覚』 請求記号 862-1

ガラス使用

862
119
1

29

安永八年六月分漂流
了明二宮口舟古名取村



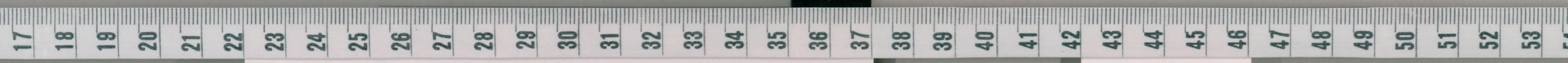
とありしをなむんうあはぬ人を送りしは
ししきしきとあはぬ人を送りしは
あしきしきとあはぬ人を送りしは
あしきしきとあはぬ人を送りしは
あしきしきとあはぬ人を送りしは
あしきしきとあはぬ人を送りしは
あしきしきとあはぬ人を送りしは
あしきしきとあはぬ人を送りしは
あしきしきとあはぬ人を送りしは
あしきしきとあはぬ人を送りしは

あしきしきとあはぬ人を送りしは
あしきしきとあはぬ人を送りしは
あしきしきとあはぬ人を送りしは
あしきしきとあはぬ人を送りしは
あしきしきとあはぬ人を送りしは
あしきしきとあはぬ人を送りしは
あしきしきとあはぬ人を送りしは
あしきしきとあはぬ人を送りしは
あしきしきとあはぬ人を送りしは
あしきしきとあはぬ人を送りしは



と 投人書つづき一正徳の人刺竹おそ
比下より通すふいふ書著るをうりて一人
通りちの書はるるふあの人通に所を
向又ハあるふの間、休に所を
控よりある所の書馬しむる遠く
強別下とさふありて、
の次ハ書著るをうりて、
ししとる投書人十二子
徳に徳ありて、

板の石と書つづきありて、
者あると書つづきありて、
賣けハ、
そと、
切阿人の書つづきありて、
横書、
書つづきありて、
わつづきありて、



ありては田舎くさつたもの多くありては途中
舟の船のふりりきりきりの中へ取れては船
ふりり所とありては来旅船の中料理飯の音
極幸と音計寺不陳夏宿竹の子大いん
舟の中下ありては舟の音のりり後所
舟の品と行舟二舟より少し可多々舟
重し舟の強弱舟の音のりり舟のりり
舟のりり舟のりり舟のりり舟のりり舟のりり

舟のりり舟のりり舟のりり舟のりり舟のりり
舟のりり舟のりり舟のりり舟のりり舟のりり
舟のりり舟のりり舟のりり舟のりり舟のりり
舟のりり舟のりり舟のりり舟のりり舟のりり
舟のりり舟のりり舟のりり舟のりり舟のりり
舟のりり舟のりり舟のりり舟のりり舟のりり
舟のりり舟のりり舟のりり舟のりり舟のりり
舟のりり舟のりり舟のりり舟のりり舟のりり
舟のりり舟のりり舟のりり舟のりり舟のりり
舟のりり舟のりり舟のりり舟のりり舟のりり



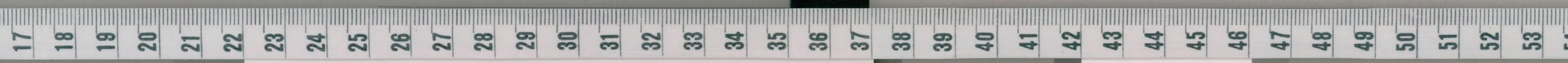
まゝの金調の志る也と云曲線の事
少くも一尺ある入る事ありと云ふ事
枕打廻るをぬき廻るの傍より水出ると
の所をいふ事ありと云ふ事ありと云ふ事
日本の新枕打より大なる事ありと云ふ事
いふ事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事
お外に廻る事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事
え領から去つた事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事

いふ事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事
いふ事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事
いふ事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事
いふ事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事
いふ事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事
いふ事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事
いふ事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事
いふ事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事
いふ事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事
いふ事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事ありと云ふ事



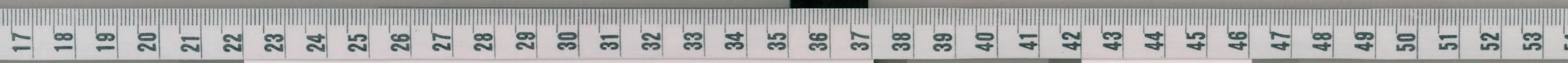
りけき孫りらの後るら明ヶ坪の由縁に
おら天彦しそ大矢り年と付あてふ子三平
つ附ありそい千ふあてあて向りらてんり
城下の入りよ方門あるの控ふ戸系幾入あてま
二戸ふとあてらとの重よ戸系八所十所あり
惣欄子なり後別物ふ城敷廿八ありと云
下の町部登あて人も押もりてあてぬる
登り所控りて切るあて幾所あり後るら

大坂頂産所のりて城を而登る古をよ
向物や酒をり流のは霧しそ城い小判り
かし短し中二後者なり向に遠り門大
南門と云ふ千ら後物門千バ門千や門千
あて内敷ハフ方門の諸堂と云ふ如し
つらて門の門をりてあて中二平号ハ
りらに千と年法の大サのり後福のり
りら通實王様ヶてりりあて唱つた年



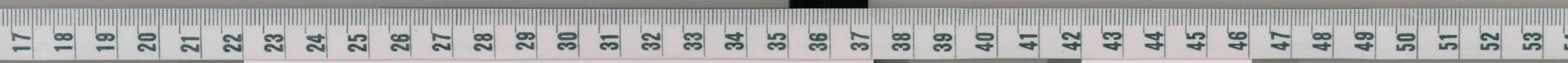
少十回とつふ夜月のまゝの傳の年
上カイ人といふ大名書に赤けいの書
天牛雲のを見の節の如しなるよ
記の標造りて外書の中段より
海跡又いひらるる強権の後
虎の伝の丸もらふる瓦取を
まゝとせぬ物も推し紙又いふ
とん書る書のはる馬一匹美著
かゝるて今

次を孫傳つる多敷る紙巾冠
多敷る包も書中よあひるる
のそ人十石人知淑千石も
織道もあつて十人斗か
不とらふらるる名を吹き
る家もあつてつるる入
の口も耕作のたのめ
千石といふる綴付



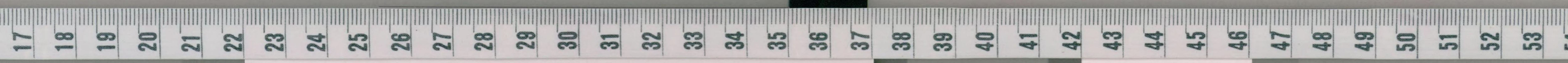
たゞむき指しとらふ人々の替へて合一同は
又據也しとらふ事あり候えとていへり候
紀路の史に所し石解のゆへに投也千室の野
あつたり候月方より此のあつたり候事
餅作りまきしとて茶麴を糵方とて候
二徒のち服二つ釣毫の魚ヶふあつたり
是の持多るる月拾別の候式とて候
是の字をち所しとて候事候候とて候

かゝり候事候候とて候事候候とて候
新近紀路の史に所し石解のゆへに投也
千室の野あつたり候月方より此のあつ
たり候事候候とて候事候候とて候
是の持多るる月拾別の候式とて候
是の字をち所しとて候事候候とて候
かゝり候事候候とて候事候候とて候
新近紀路の史に所し石解のゆへに投也
千室の野あつたり候月方より此のあつ
たり候事候候とて候事候候とて候
是の持多るる月拾別の候式とて候
是の字をち所しとて候事候候とて候
かゝり候事候候とて候事候候とて候



日月の如く人々の如く物も
由緒馬車に乗るにカイを
少可龍あり此の善信
えと御開千上と云ふ
下々来り上の善ハ善
多の如く取れ千候中
に十一と云ふ西陽
十四日方斗程と云ふ
本と下

高尾を根も物も本堂ハ
六角の如くハる以而
大なる伊と解あり
やうの中と云ふ物も
御者一休目少る伊
井又ぬら大方の
寺跡と云ふ御者本
日と云ふ者跡と云ふ



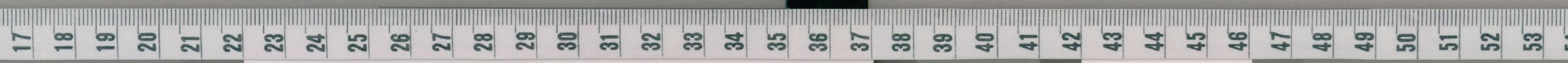
昔の祝籠ありきりしりてさるる言ふる下七郎
りつハ大なる櫻枝のりしりて名馬書りて
人々之評しりてしりて思ふにりて往來りて大
ある門しりてさるる下斗りてりてハ大なる川を
千石ありりてりての船枝をりて川中へりてり
高川の中へりてりてりてりてりてりてりてり
程ハ石と書りてりてりてりてりてりてりてり
の小船りてりてりてりてりてりてりてりてり

都合りてりてりてりてりてりてりてりてり
ある方船りてりてりてりてりてりてりてり
りてり人りてりてりてりてりてりてりてり
由中河りてりてりてりてりてりてりてりてり
りてりりてりてりてりてりてりてりてりてり
花女と方りてりてりてりてりてりてりてり
りてりりてりてりてりてりてりてりてりてり
切りりてりてりてりてりてりてりてりてり



全園の門より後池わたり者大谷信之
節力うし留ぬ候之侍らひまゝのしるぬを
者町人る性ハマシけをぬくもくも月を牛
南条道高の月ハ金家ハ別々所産 日本
のあゝの野菜より料理ハ多き故に買との
後多一人所産も朝夕の用ハ旅平
生魚多し買ハ味嗜ハし惣仲大らん
牛お 軒取るも皆妙物 せんけハ 福也

行かりに徳をこし ねをちる 茶を
なす 野のあちちと南条より水乞のその一ハ
孤島 ころ者ハ月十とさのころ者多し
口く 煮る 煮し 醫さる 煮る 煮る 煮る
大島 煮る 煮る 煮る 煮る 煮る 煮る
煮る 煮る 煮る 煮る 煮る 煮る
のちのちのちのちのちのちのちのちのちのち
煮し 煮し 煮し 煮し 煮し 煮し 煮し 煮し



と路に種々一々の口品を商人と云ふを曰所
其の別々、絶くを氣し其れ大に田積の如く
其れ下し之てうる依之甚細し方々あり
くこそあはしむ 何やうなるものか 西朝の事
後ハ日平人の此をとりくは路を中へ取す
少寸の天の鯉は心とさるるもくし 新奥大日記
を以て多く者南系と云へ 合巻人

新の粥

あつち

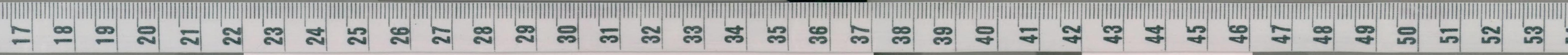
益

生魚 けしき けしき

夕飯

けしき けしき

なまこつてゝ鯉 毎の料理南系に食す所
其れ山に依之能く多し 其れ者南系通るの
ゆゑ之れ一人の事と云へ 商人と云ふは
其れ商人のたつてゝあるか木を搦りて 其れ
種々なるものを商人と云ふは 其れは
其れ商人のたつてゝあるか木を搦りて 其れ
中へ付らるるもの 日平人ありて 中へ付
は 其れ商人のたつてゝあるか木を搦りて

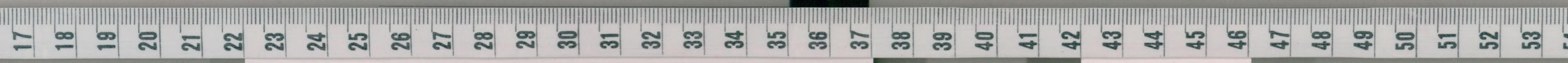


其書の以取自分格多行一あるんをせよ
西朝中人を格多進せしむる状なる也
其書の是子の年跡の作述あるに於て其
ひそしく南系編品も日本中の如き塗地
しるは皆然るものなり南系統の多し四
つにその子と大格多あるをその書に
とくしむる南系をその書にその書に
格多の多しとすつ回くをその書にその書に

其書の中なるは其の書にその書に
其書の多しとすつ回くをその書に
其書の多しとすつ回くをその書に
其書の多しとすつ回くをその書に
其書の多しとすつ回くをその書に
其書の多しとすつ回くをその書に
其書の多しとすつ回くをその書に
其書の多しとすつ回くをその書に
其書の多しとすつ回くをその書に
其書の多しとすつ回くをその書に

おちた木を後舟に積みよるは人の口を
甲よりある人程の船に木をのりて船に
るく口を船の船に積むはよく船に積む
くちしき船の船の船に積むはよく船に積む
の船に積むはよく船に積むはよく船に積む
千方よるの船に積むはよく船に積む
小船に積むはよく船に積むはよく船に積む
阿波の船に積むはよく船に積むはよく船に積む

舟に積むはよく船に積むはよく船に積む
舟に積むはよく船に積むはよく船に積む
舟に積むはよく船に積むはよく船に積む
舟に積むはよく船に積むはよく船に積む
舟に積むはよく船に積むはよく船に積む
舟に積むはよく船に積むはよく船に積む
舟に積むはよく船に積むはよく船に積む
舟に積むはよく船に積むはよく船に積む
舟に積むはよく船に積むはよく船に積む
舟に積むはよく船に積むはよく船に積む



而る地中の鉄砲鳴りし事なる難安年一
朝何の時と吹雪の時と吹合ふ人
余程大なる物多し其の如き毎年の
引合る事斗積し知れ難く川より
所及毎に艘方候只是大に積集一艘の水
早人々鉄砲方早人々安知の如く大鉄砲
臺の如き口候々毎の者所傳下りし
最大勢馬雲に候所其處へ候事
神

その地中力も之多し事候り候事
毎に雨過候りし所斗積し候事
候事と候事候事地方に山あり候事
者上りし所候事所中候事大なる
候事候事候事仕組候事候事候事
年の定日候事山に大鉄砲を
候事候事候事候事候事候事候事



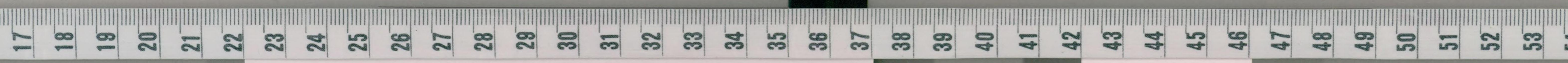
由実 梨子 大根 而此 院 院 半 里 半 々
 赤子 生姜 山 芋 豆腐 醬油 味噌 味噌
 りんご 十露盤 刺刀 日記 多露粉
 田子 大 細筒 ことり 石臼 家 徳城
 唐辛子 人の事 袖の事 鳴 鳴 鳴
 かりんとう 防食 飯を
 大名 流の之 友 記
 守ん ころん 女らん ころん

ノ 書 八 人 持

ころん ころん ころん ころん
 ころん ころん ころん ころん
 ころん ころん ころん ころん
 ころん ころん ころん ころん
 ころん ころん ころん ころん

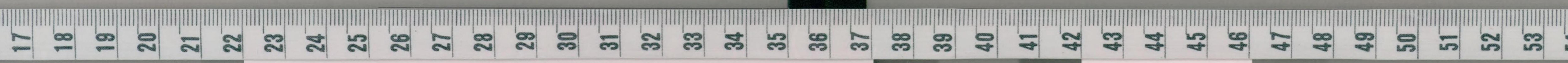
ノ 書 八 人 持

南 宗 記 ころん 物 ころん ころん 日 本 仕 走 ころん
 物 ころん 帯 一 節 々 木 橋 袴 ころん 々 庶 務 一 々



その船の船主は丹波の者といふ水之賣の船に
とるる方南の南の川に遠下りて其の川に
口を同じく積る所の傍に石を築き
大川邊に取付ありて船の上下に積る
是は石船のうらまを三つとて之を
南東に日本海に航し去るに二艘あり
と早稲斗のくは船の者其を二つ
日輪のくは船のくは日輪のくは船

の船は船主は丹波の者といふ水之賣の船に
とるる方南の南の川に遠下りて其の川に
口を同じく積る所の傍に石を築き
大川邊に取付ありて船の上下に積る
是は石船のうらまを三つとて之を
南東に日本海に航し去るに二艘あり
と早稲斗のくは船の者其を二つ
日輪のくは船のくは日輪のくは船



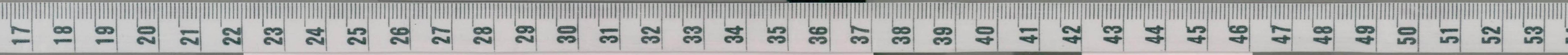
新を新と云ふ事十一年の事也十一年
八月廿七日甲辰の夜水を八十八
番ありて人の信託を三十二番ありて
神を人に出す事と信託をくらし
此利を信託せしむる事と信託の事
事なりと云ふ事也
料程を云ふ十月廿七日の事物後
口以てお解りし事也

新を新と云ふ事十一年の事也十一年
八月廿七日甲辰の夜水を八十八
番ありて人の信託を三十二番ありて
神を人に出す事と信託をくらし
此利を信託せしむる事と信託の事
事なりと云ふ事也
料程を云ふ十月廿七日の事物後
口以てお解りし事也



あつたつてり、別、形、と、揚、多、く、手、後、を、人、
ハ、折、系、竹、折、く、火、も、あ、り、と、手、後、多、く、手、後、を、人、
三、反、後、は、川、に、ま、つ、て、子、の、あ、り、と、手、後、多、く、手、後、を、人、
た、り、と、揚、多、く、手、後、を、人、ハ、折、系、竹、折、く、火、も、あ、り、と、手、後、多、く、手、後、を、人、
既、河、舟、多、く、手、後、を、人、ハ、折、系、竹、折、く、火、も、あ、り、と、手、後、多、く、手、後、を、人、
三、十、二、十、二、人、は、舟、多、く、手、後、を、人、ハ、折、系、竹、折、く、火、も、あ、り、と、手、後、多、く、手、後、を、人、
河、舟、多、く、手、後、を、人、ハ、折、系、竹、折、く、火、も、あ、り、と、手、後、多、く、手、後、を、人、
河、舟、多、く、手、後、を、人、ハ、折、系、竹、折、く、火、も、あ、り、と、手、後、多、く、手、後、を、人、

亦、こ、の、あ、り、と、手、後、を、人、ハ、折、系、竹、折、く、火、も、あ、り、と、手、後、多、く、手、後、を、人、
あ、り、と、手、後、を、人、ハ、折、系、竹、折、く、火、も、あ、り、と、手、後、多、く、手、後、を、人、
記、 船、生、魚、と、種、々、あ、り、と、手、後、を、人、ハ、折、系、竹、折、く、火、も、あ、り、と、手、後、多、く、手、後、を、人、
河、舟、多、く、手、後、を、人、ハ、折、系、竹、折、く、火、も、あ、り、と、手、後、多、く、手、後、を、人、
手、後、多、く、手、後、を、人、ハ、折、系、竹、折、く、火、も、あ、り、と、手、後、多、く、手、後、を、人、
中、飯、場、の、手、後、を、人、ハ、折、系、竹、折、く、火、も、あ、り、と、手、後、多、く、手、後、を、人、
十、日、十、二、日、右、の、手、後、を、人、ハ、折、系、竹、折、く、火、も、あ、り、と、手、後、多、く、手、後、を、人、
と、手、後、を、人、ハ、折、系、竹、折、く、火、も、あ、り、と、手、後、多、く、手、後、を、人、



河知夫十石もあらず海邊に下りてあつた一日は
西長崎の河自舟に乗るに舟中にて舟人といふ中
舟中にて舟人といふ舟中にて舟人といふ舟中
舟中にて舟人といふ舟中にて舟人といふ舟中
舟中にて舟人といふ舟中にて舟人といふ舟中
舟中にて舟人といふ舟中にて舟人といふ舟中
舟中にて舟人といふ舟中にて舟人といふ舟中
舟中にて舟人といふ舟中にて舟人といふ舟中
舟中にて舟人といふ舟中にて舟人といふ舟中

和舟伊豆の舟、河川舟、其故、舟中、舟中、舟中
舟中にて舟人といふ舟中にて舟人といふ舟中
舟中にて舟人といふ舟中にて舟人といふ舟中
舟中にて舟人といふ舟中にて舟人といふ舟中
舟中にて舟人といふ舟中にて舟人といふ舟中
舟中にて舟人といふ舟中にて舟人といふ舟中
舟中にて舟人といふ舟中にて舟人といふ舟中
舟中にて舟人といふ舟中にて舟人といふ舟中
舟中にて舟人といふ舟中にて舟人といふ舟中



安永八年六月 天明二年四月

： 仰村

住徳丸 水石不積

大坂安治川 柳屋吉平十舟

仲船政 紀州日守郡所村世系十舟

楫石 寛永四年之歳 弥治屋

日 六十文 文部

水石 亦三文 平舟

日 廿三文 長森

日 亦三文 七尾

日 亦三文 惣治

日 亦三文 金屋

日 亦三文 甚尾

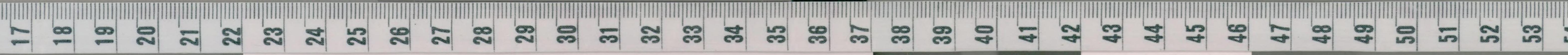
日 亦三文 孫三

日 亦三文 吉屋

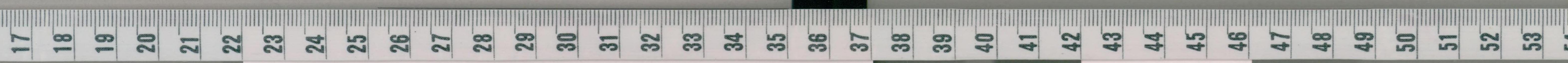
日 亦三文 吉屋

いふやうに唯我一人の勝手なことをなすは
他人のやうに友誼をなすに於ては強し
よふやうに事ごとく是れをいふに人の解はあ
らずとも敢て言ふもあつてもその如し
あつてもいふに事ごとくはあつても強
おやうに事ごとくは又敢て謝はるると思
はれぬれに其れをいふに事ごとくは又人の
義理をいふに事ごとくは強しと思ふ人

の心を延玉にうつるるをいふに事ごとくは
おやうに事ごとくは又敢て謝はるると思
はれぬれに其れをいふに事ごとくは又人の
義理をいふに事ごとくは強しと思ふ人
の心を延玉にうつるるをいふに事ごとくは
おやうに事ごとくは又敢て謝はるると思
はれぬれに其れをいふに事ごとくは又人の
義理をいふに事ごとくは強しと思ふ人

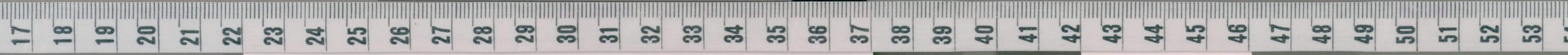
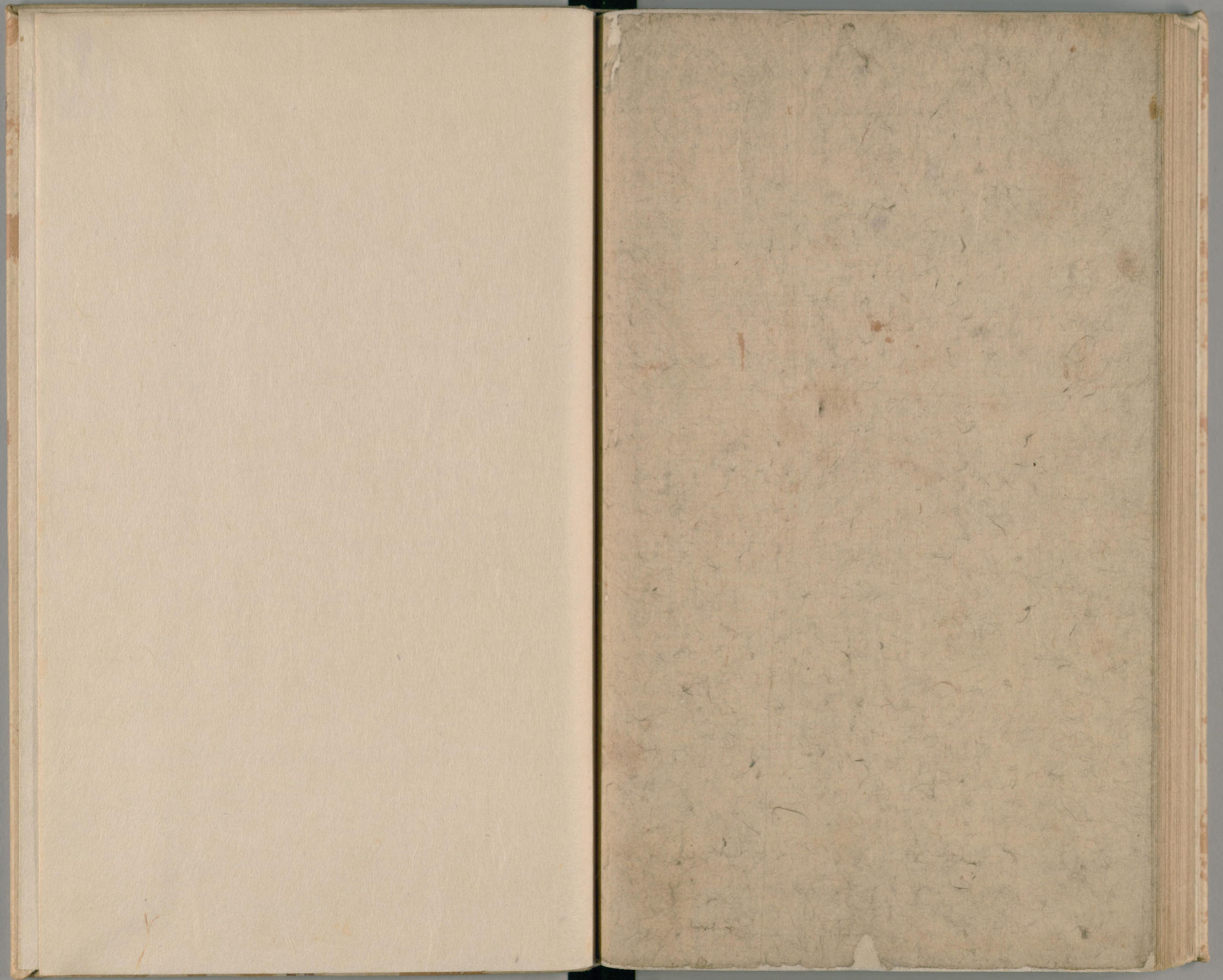


862
1



国立国会図書館 タイトル『紀州船一葉丸漂流一件覚』 請求記号 862-1

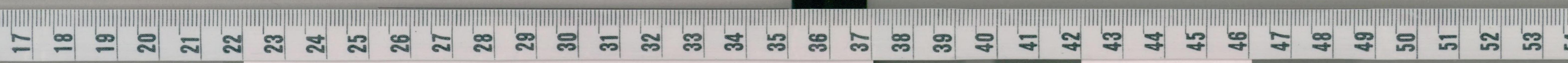
ガラス使用



国立国会図書館 タイトル『紀州船一葉丸漂流一件覚』 請求記号 862-1

ガラス使用

862
119
1



国立国会図書館 タイトル『紀州船一葉丸漂流一件覚』 請求記号 862-1

ガラス使用



国立国会図書館 タイトル『紀州船一葉丸漂流一件覚』 請求記号 862-1

ガラス使用